

# 学会ニュース

日本女性学会

第18号 1984年5月

## 目 次

- 第5回総会等のご案内 ..... 藤枝 淳子 ..... 2
- 第5回日本女性学会定例総会および公開プログラム ..... 3
- 「女性と宗教」
  - 女性の視点で仏教を考える ..... 源 淳子 ..... 4
- 両性性（両性具有性）について
  - ① 「アニマ・アニムス」論への一つの批判 ..... しまようこ ..... 5
  - ② 両性具有性は、男女同質になることではない ..... 村上 益子 ..... 6
- 日本女性学会に期待されること ..... 田中由布子 ..... 8
- 寄贈図書・資料 ..... 10
- 新入会員紹介 ..... 10
- 事務局だより ..... 11
- 編集後記 ..... 11

## 第 5 回 総 会 等 の ご 案 内

藤 枝 滯 子

到来を待ちかねた春は急ぎ足で立ち去り、湧き立つような新緑の候を迎えました。皆さまお元気でいらっしゃいますか。

別記でごらんのとおり、今年の総会と関連行事は、小林富久子さんのご尽力により早稲田大学で開催する運びとなりました。同大学関係者の方々に、紙上を借りて御礼申し上げます。

早いもので、設立総会以来、日本女性学会は5年目に入ります。今年の総会で会員の皆さまにとくにご討議いただきたい件に、監事会のことがあります。2年任期の監事会は、今年2回目の改選期を迎えますが、前回(1982年度)は設立総会時の前監事会が現監事会の推薦リストを作成して総会にはかり、ご承認いただく方法をとりました。今回は、全会員の投票による選出を検討しております。目下のところ、6カ月ないし1年を準備期間とし、選挙方法等につき、皆さまのご意見をもとに案をまとめて、公選制へ移行することを考えている幸いです。監事というのは、学会を運営するためのいわば雑用係ですが、広く人材を求める意味からも、このほうが望ましいのではないのでしょうか。総会で活発なご意見をいただきたく存じます。

また、関係以外の遠隔地の会員で、総会当日ご出席になれない方は、監事会への参加を含めて、どういふ方々で学会活動に参加するのを望ましいとお考えか、お手紙でぜひご意見をお寄せくださるようお願いいたします。

総会にひきつづき、「女性と宗教」<sup>\*</sup>のシンポジウム。私たちの<sup>\*</sup>日々の生活や意識に様ざまの影を落としている宗教に、女性学がどう切りこんでいくのか、ごいっしょに考えたいと思います。

夕方からは大隈会館で懇親会。二次会、三次会をお考えの方は、宿舎その他の場所でどうぞ。

二日目午前中の分科会について、すでに予定されている以外に、ぜひこういう分科会をもちたいとお考えの方は、テーマを事前にご連絡ください。

午後に講演を予定している南カリフォルニア大学のG・F・オーレンスタインさんは、フェミニスト芸術についても造詣の深い方であることをご紹介しておきたいと思ひます。

総会の議事のほかは、すべて公開ですので、会員以外の方々をもどうぞお誘いください。

なお、当日は受付で84年度会費を申し受けますので、ご用意ください。また、総会にご欠席の方々、会員滞納のある方々、会費納入にご協力をお願いいたします。

## 第5回日本女性学会定例総会および公開プログラム

6月16日(土)

午前11時～12時30分 総会

午後13時30分～17時 公開シンポジウム

テーマ「女性と宗教」

シンポジスト

- フェミニズムとキリスト教の関係 エリザベート・ゴスマン  
(聖心女子大学教授)
- 女性の解放と宗教批判 田川健三  
(大阪大学教授)
- 女性の視点で仏教を考える 源 淳子

司会 白井堯子

松原純子

午後17時30分～20時30分 懇親会 会場(早稲田大学・大隈記念館)

世話人 北沢杏子

小林富久子

6月17日(日)

午前10時～12時 分科会

- 移りゆく女性役割と男らしさのジレンマ 福井浅子
- 両性性について —ユング「内なる異性」を読むことを通して—  
船橋邦子

午後13時～15時 公開講演会

テーマ 「アメリカの大学における女性学の動向」

講演者 グロリア・F・オーレンスタイン(南カリフォルニア大学准教授)

1971～1972 パリ大学客員教授

主著 The Theater of the Marvelous: Surrealism and  
the Contemporary stage (1975) そのほか、女性問題、  
女性学についての論文多数

午後15時～17時 監事会

- 会場 懇親会以外は、すべて早稲田大学7号館小野講堂

- 一般参加費 500円

## 女性の視点で仏教を考える（シンポジウム・レジュメ）

’84.6.16

源 淳 子

### 1. ブッダの教え

男女差のない人生観より出発

涅槃に至ることにおいて、男女の差は認められない。

↓

空思想の流れの中に継承される。

### 2. 教団形成に伴う問題点

- 戒律の数、比丘尼への態度、女性は不浄である、女性は誘惑者である etc

女人五障説

変成男子の思想

- テーラー（長老尼）ガーターにあらわれる具体相

在家者への教え

教えの継承

### 3. 在家者の仏教

- 親鸞の生き方 妻（恵信尼）との関係

罪惡観の問題

- 在家者の在り方 女性のあり方

### 4. 今後の課題

- フェミニズムが仏教で出てこないのは何故か。

※ なお、エリザベート・ゴスマンさん 田川健三さんのレジュメは、当日会場で配布の  
予定です。

## 「アニマ・アニムス論」への一つの批判

しまよう子

「両性具有性」をテーマとする研究会を始めたとはいうものの、現段階ではテーマ自体を十分に対象化できず、方法論とテーマは混然一体となってわたしたちの前に変幻自在の姿を現わすという印象を深くしている。しかしこのテーマが従来の科学観・学問観をゆさぶるという意味では、すぐれて女性学的な、学際的なものだという確信はゆらがない。このテーマを身近に住まわせることによって女性学の基本原理を模索しながら、女性（人間）解放運動論にも息の長い示唆が得られるのではないかという予感がする。

今のところ粗略な仮説として、両性具有性研究のイメージは二つの方向づけが可能であろう。ひとつは、歴史的に形成され区分されてきた男性性と女性性が相互に補い合って織りなすダイナミックなかかわりとして、もうひとつはわたしたちが共有している男性性・女性性という概念を取り扱ったところで見えてくる自然、ものごと・人格など、変化しつつ存在するものの性格を表現する基本原理としてである。今回の研究会でとりあげた E・ユングの『内なる異性』は、前者のイメージに合致している。

S・フロイトの男性像を基盤にした生物学主義に比べて、C・G・ユングは個人の無意識世界により広汎な文化的形成作用の光をあてた。

ユングの「アニマ・アニムス論」は、男女両性とも心の深層に“内なる異性”像を持った両性具有的存在としてとらえていることは興味深い。この両性具有モデルは、性別役割期待に沿って形成されるペルソナを補って、男性性と女性性が織りなすダイナミズムを表現している。しかし“内なる異性”としてのアニマ・アニムスのイメージは、これまで文化の中で強化され実体化されてきた女らしさ・男らしさの特性をそのまま引き写しているために、無意識世界の異性像に気づいてこれを個性として補完すると言っても、性別役割分業に根ざすセクシュアル・イメージを乗り越えるダイナミズムになり得ないのではないかという疑問がわく。もちろん、C・G・ユングも E・ユングも、男性を優位の性、女性を劣位の性という記述はしていない。けれども、たとえば、「アニムスはロゴスの本性にふさわしく認識と理解」をもたらし、「純粹に女性的な心にとってよそものである精神」を個性の中に呼び起こして内面化するアニムスの役割の記述には、生物学的決定論の系譜が読みとれる。E・ユングの女性の創造性のとらえ方によると、それは“関係の形態”をとる日常生活の中で発揮され、ロゴスによる創造には弱く、直観や感覚・感情中心の創造的行為を得意とすると言う。E・ユングは男性崇拜や男性の過大評価はすでに時代おくれのものになっていると認識しているにもかかわらず、歴史的に強化されてきた能力の特性と

生物としての性をしばしば単純に結びつける記述をしている。これをそのまま肯定的に受け入れるわけにはいかない。

両性性のとらえ方を、わたしたちが持っているいわゆる男らしさ、女らしさのイメージの補完・統合と考えるなら、アニマ・アニムス論はペルソナとして獲得された男らしさ・女らしさに固執することから生じる現実の問題を解く鍵を与えてくれる。自己の“内なる異性”に気づくことによって、意識と無意識の新たなかけ橋を発見し、個性として生きられる自由領域を拡大するきっかけとなるだろう。わたしが危惧するのは、生物学的な性差が根強い性差別の社会構造を支え、人びとの無意識を文化としてすくい上げていくような社会（これは現代の日本の社会を意味している。フェミニズムの思潮がより多くの女性の意識に刺激を与えつつあるとは言っても…）では、既成の男性性・女性性のダイナミズムによる両性具有観は、意識下で性差別を温存したままの性区別を個性という各に置き代えて文化の体制を維持していく方向にも利用されかねないという点である。

ユング夫妻の精神分析における両性具有性の概念を歴史的に位置づけて評価しつつも、概念形成の深いところで男性主導型の発想から十分に自立した「アニマ・アニムス論」であるか否かについては、さらに議論を重ねる必要があるだろう。その過程で、わたしたちのそれぞれの両性具有観が照射されるのではないかという気もする。

男性性・女性性が相互に織りなすダイナミズムとしての個性という魅力的に響く見解は、わたしたちがよりラディカルな視点から両性具有性にせまろうとすると、どのように再評価されていくだろうか。従来の科学観を根本からゆさぶった現代の量子力学をはじめとして、自然科学が明かしつつある存在のイメージとも結びつけて両性具有性に取り組んでみたい。この意味で、自然科学にかかわる仕事にたずさわっている方々の研究会へのご参加を期待したい。

## 両性具有性は、男女同質になることではない

村上 益子

今回はまず最初に溝口さんが、女性ボディビルダーのリサ・ライオンをとりあげ、両性具有性と半陰陽とどちらがうのか、討議してほしいという提案をされた。つまり、人間が両性具有的になってゆくとますます性差異が無限に減少してゆくのか、という疑問であるように思われる。

現代、女性は精神的な点でも従来の男性文化をどんどん消化していつているわけであるから、肉体的にも男性に近似してゆくということは十分ありうることだと思う。将来、オリンピックの

記録が、種目によっては、たとえばマラソンなどでは、女性が男性を陵駕するだろうという予言がなされているくらいであるから。将来、男性が行なってきたあらゆるスポーツを女性がこなすであろうともいわれている。肉体の分野においても、男女共通のもの、たとえば筋肉の力、持続力、機敏性等は、女性もますます男性に近似してゆくだろうということはうたがいのないことである。しかし、だからといって、女性の肉体が男性の肉体に近くなっていったからといって、女性という肉体の質が変化するわけではないし、女性というアイデンティティーが減少するわけではないであろう。たとえ、女子プロレスラーが、並の男性よりはるかに強い肉体を持とうと、女であることに変わりはないのだから、肉体的にも、精神的にも半陰陽という概念とは無縁だと思う。つまり、従来、男性的分野のものと考えられてきたものの領域で、女性が能力を発揮したからといって、大げさに騒ぐ必要はないように私は思う。

将来、女性が解放され、男性も解放されていった場合、女性も、ますます両性具有的になっていくわけである。つまり、精神的にも、肉体的にも、両性に共通するものがますます増大していくわけである。しかし、私のいいたいことは、共通のものが増大したからといって、両性の差が縮小してゆくものではないということである。両性具有的になるということは、男性性、女性性という、対立する異った質を解消させてゆくことではないということである。

男性性・女性性という二つの極の質の対立は、宇宙の中・男と女の間の対立にとどまらず、一個人の中でも対立しあっているとすれば、アニマ（男性の内なる女性性）、アニムス（女性の内なる男性性）の仮説である。エンマ・ユングは、この二つの極が一個人の中で相互に破滅的に働き合う場合と、逆に相互に調和して働くことにより、互に他方を高め合う場合を想定している。個人の中の内面の緊張が弱いまま、アニマまたはアニムスが猛威をふるうと、人格全体が危機にさらされる。たとえば、知的女性の場合、無批判のまま男性の知的体系をうのみにしてしまえば、彼女の女性性が弱まったり、アイデンティティーが危機にさらされたりする。また男性の場合アニマの未発達な男性が、相当見識のある男性でも、妖婦の奸計に簡単にひっかかり身を亡ぼしてしまう等の例があげられている。タンホイザーのヴィーナスの山とか、龍宮城の乙女姫様とかローレライの伝説は、これを物語っているわけである。

したがって、両性具性の探求とは、この対立し合う二つの極力、どうすれば互に他方を亡ぼさず、互に他を高め合うことができるかという探求だと思う。内面の緊張が強ければ、アニマ、アニムスの発展は、逆にそれぞれの男性性、女性性を逆に発展させようという、弁証法的思考とでもいべきものが、要求されるのである。たとえば、女性の場合、女性としての精神性が強ければ、男性的精神の吸収は、女性の精神性をこの上もなく強靱にする。日本の男性を例にとると、日本の男性は、男性的魅力が少ないというのが先回集った方たちの意見であった。つまり彼等は、

女性を差別する意識は強い割に、御本人そのものは女性的で陰湿であるというのである。その理由はこうであろう。つまり、女性蔑視の意識が強ければ、彼等の内なる女性性＝アニマは発達しない。アニマが未発達であれば、逆に女性性と対立する極である男性性も発達しない。肩書きとか、給料の高さで、女性に優位を保とうとしか思いつかない男性は、一人の個人としての男の魅力を身につける見込みのない男性であろう。世界の中で日本の男性の魅力度は26番目という統計を前に新聞で読んだことがあるが当然かもしれない。

だから、男も自分自身のアニマを発達させなければ真の意味の男性性には到達できない。たとえば、モーツァルトとか、ショパンは、女性からどんなに真剣に多くのものを学んだことだろう！しかし、彼等が、男性としてのアイデンティティーが強かったからこそ、それが可能であったことを人は気づくだろうか？「プライド」それが只一つのモーツァルトの情念だったとロマン・ロランはのべているが、彼があえてパトロン（司教）の下でのサラリーマン的生活を捨てて、窺乏から苦死への道を選んだことは、彼の男性としてのアイデンティティーの強さを示す証拠であると思う。ショパンの男性的側面を示す言葉としては、私はシューマンの「花の蔭にかくされた大砲」という言葉をあげたい。英雄ポロネーズを作曲する男性的なショパンは、優雅で、愁いに満ちたショパンと同一人物である。

従来男性の分野とされてきた分野で仕事をする女性の場合でも、つきつめてゆくと、いつか、自分の女性であるという個性を考えざるを得ない切羽詰まった局面に立たされる境地につきあたるのではなかろうか？そして、それは、若い時というよりも、むしろ成熟の段階でつき当るのではなかろうか？それは若くて、素朴な女性性の殻を脱して、もっと成熟した質の女性性へと進展していく過渡期なのではないかと思うのである。女性でも、男性でも、野蛮で、原始的な女性性または男性性のまま中年に達すると、みるからに魅力の乏しい人間になってしまうような気がする。日本の中年の男性で魅力ある人が少ないのは、そのような理由ではなかろうか？。

訂正

第17号 村上益子氏の報告の中で、10頁の上から15行目の「環境説」となっている部分は「素質説」の誤りですので、お詫びして訂正いたします。

## 日本女性学会に期待されること

田 中 由布子

性差の関わる既存の自然科学と社会科学からの学問的離婚と新しい科学の創設、その拠点とし



て建設途上にあるのが日本女性学会であると思われる。既存の諸科学の中で内包化されては外存化されるような“婦人問題”のあり方から外在的に独立し、新しい科学の建設を志そうということである。新しい科学の創設は、既存の諸科学にとり込まれ同化・従属を繰り返している女性研究者とそれに続く5,500万人の日本女性の生き方と密接に関係している。新しい科学の建設の拠点の1つが日本女性学会であるとするならば、女性解放運動の拠点は既存の諸々の社会運動から離婚した新しい運動体の1つ1つにある。

例えば、社会政策学会、日本社会学会、日本家政学会がある。これらの中に婦人労働、売春、主婦問題のそれぞれを研究する女性研究者が包摂されている。学会といえば、いずれも知の生産の先端部分である。そこにおいて女性は研究者としても分断・吸収されて存在し続けている。それは女性の企業、風俗営業、家庭への分断・吸収性と相まって女性を知性的に、実践的に外在的自立を逐げることをできなくしてきた。そこで私達は'80年代以降、日本女性学会の方へこれら女性研究者を逆にたぐり寄せてくる必要がある。日本の女性研究者の知性は5,500万人女性のために使われるべきで、それだけでなく多い男性研究者と5,500万人男性のために使われる必要はない。また、man = 人間のための研究自体、女性研究者には男性に伍した研究者生命の持続以外、実際の人生には何の利点もないのである。

日本女性学会の方から社会政策学会、日本社会学会、日本家政学会を眺めるならば、そこで依然“婦人問題”についての悩みと模索が続けられているということである。外在的に自立する勇氣を持ち、新しい科学の創造へ向かわない限り、3種学会での“婦人問題”についての悩みは続く。女性とはもともと、婦人労働者、売春婦、主婦であることを同時に2役、3役こなす存在であってひとりの女性が自分の身体を3部分に分断して生活しているのではない。ひとりの女性を3役に使い分けるのは既存の学問区分と社会制度の都合によるもので、新しい科学の創造と新しい女性解放運動の創造を試みている女性たちの意向に反する扱いでしかないのである。

日本女性学会と新しい女性解放運動の方へ結集することによって、女性は2度と既存の学問区分と社会制度の分断、吸収性に乗らない心構えがいる。そして女性がこれからなすべきは性差の関わる既存の自然科学と社会科学に対する外在的批判と新しい世界観の建設であると思われる。日本女性学会の役割は、man = 人間が積み上げてきた知性のブロックの“婦人問題”的扱いを取り壊し、新しく、外在的に自立する女性像をman = 人間の側に植えつけていくという課題も担っていると思われる。つまり、既存科学の“婦人問題”観の破壊と新しい女性の世界観の建設である。新しい世界観の建設を目指す女性学学徒にとって既存の“婦人問題”観はman = 人間が押しつけたがっている、女性にとっては破壊の対象となるものである。

日本女性学会は女性研究者の知性を5,500万人女性のために使うべく、いかに組織し、いか

に運用していくかという課題も担っていると思われる。縄文・弥生時代頃の日本女性は太陽をまだ直接、仰いでいた筈である。

そこに到るべく、日本丸の知性と制度の運行方向を少しずつ女性向きに変えていくことは日本女性にとって歴史の運行者ともなりうる壮大なロマンともなるのである。女性研究者と5,500万人女性とは日本丸女性号に乗って、日本丸の知性と制度とが押しつけてくる女性観の上に船を走らせながらその支配性を降下させつつ、直接太陽を仰いでいた頃の原始女性と出会うべく出帆の時を迎えているようだ。日本丸女性号の行く手を阻むものは、既存の自然科学、社会科学と諸制度である。そこで女性研究者は分業的協業による外在的批判研究によって、海図を作成していく必要があると思われる。そして、その海図に従って5,500万人女性が日本丸女性号を走らせていく必要がある。

日本女性学会がこれからの日本の女性史に果たす役割は大きい。大いに期待したいものである。

## 寄贈図書・資料

あごら号第82号

J A U W 132号, 133号大学婦人協会々報

Voice of women, №.47 №.48

月刊「婦人展望」'84-2

婦人情報センターだより, №16

婦人教育情報, №9

鳥居千代香さんより

大学婦人協会

日本女性学研究会

市川房枝記念会出版部

東京都婦人情報センター

国立婦人教育会館

## 新入会員紹介

## 事務局だより

- 総会の出欠について、同封のハガキに御記入のうえ、来る6月5日までに、事務局へ御返送下さい。
- 事務局が移転しました。巻末の住所を御参照下さい。
- 昭和59年度会員名簿作成の準備を始めました。昨年度の名簿以降に変更のある方は、お早目に事務局へ御連絡下さい。

## 編集後記

待ちわびた春到来、そしてあわただしくも、今年も総会が開かれる季節になりました。昨年来、規模が大きくなるにともなって、日本女性学会にもさまざまな問題が山積するようになりました。機構改革は、時代の進歩にあわせて行なわれなければなりません。梅雨空がひとときのことであるように、明るい陽ざしを待ちたいものです。

( 亀 山 )

---

発行 日本女性学会

〒103 東京都中央区日本橋2丁目2番1号

呉服橋共同ビル2F ワールド・カルチャー・サービス内

電話 03-274-1791

---